



TITLE:

兩制制度の成立

AUTHOR(S):

小野, 達哉

CITATION:

小野, 達哉. 兩制制度の成立. 東洋史研究 1998, 57(1): 1-28

ISSUE DATE:

1998-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155170>

RIGHT:

東洋史研究

第五十七卷 第一號 平成一〇年六月發行

兩制制度の成立

小野達哉

はじめに

一 唐代における中書舍人の變遷

二 翰林學士の成立

三 翰林制詔と中書制誥

(一) 制詔の内容

(二) 制詔作成の手順

四 五代の翰林學士

五 宋代の翰林學士と知制誥——結びにかえて——

はじめに

1 唐代の三省制においては、中書は詔敕起草し、また批答を作成するなど、皇帝の意志を示す祕書官の性格を與えられていた。その中書省において、草制を擔當していたのが中書舍人であった。しかしその一方で、皇帝の近臣が學士の稱謂

を帯びるなどして宮中に出入し、謀議にあずかったり、詔敕の起草を行ったりすることも、唐初よりしばしばみられた。太宗時代の魏徵・溫大雅ら秦府の故僚の流れを汲む十八學士、あるいは武周革命のときの元萬頃・劉禕之ら北門學士などが、そうしたものとして名高い。その存在の延長線上に、開元二六年（七三八）に成立し、やがて皇帝直屬の側近ポストとして確立されたものが、翰林學士にほかならない。

中國の草制制度については、山本隆義氏がその著書において、三章分を唐代から宋代の記述にあてて、翰林學士を中心に据えながら通觀をなされている。⁽¹⁾ 氏の研究においては、翰林學士の成立にともなつて、いわゆる兩制制度、すなわち重要な内制を翰林學士が起草し、重要性の低い外制を中書舍人が起草する制度が確立したことは、自明の前提とされていたようである。しかしながら礪波護氏は、『文苑英華』や唐人の文集に收録された制詔を涉獵された結果、唐代ではまだ兩制の明確な職務分擔は確立されていないという結論を導かれた。⁽²⁾ 礪波氏はさらに草制の官にも言及されて、唐代では中書舍人が文士の極任とされ、翰林學士よりも高い地位にあったこと、當時は中書舍人と翰林學士の兼任が珍しくないことなどの指摘もなされている。

草制の官の相互の關係について、もっとも注目されるのは、孫國棟氏による文官の昇進コースの研究である。員外郎ないし郎中で知制誥にあてられた官人は、次に中書舍人に昇格する。そして唐代後半においては、中書舍人のとき知貢舉を兼ねた者は禮部侍郎に昇格し、また翰林學士を兼ねた者は、戸部侍郎に昇格して學士を兼ね續けたとされる。一方の翰林學士の遷轉については、多くの場合郎中あるいは員外郎で翰林學士を兼ねて、以後中書舍人、兵部ないし工部侍郎、中書侍郎に昇進していくとされる。⁽³⁾ いずれにせよ、二つの草制の官が遷官の過程で分かちがたく結び付いていることが、孫氏の研究によっても裏付けられるのである。

ただし中書舍人ないし知制誥と、翰林學士とは草制の官としての由來も、官僚ポストとしてもった意味合いともに異にしている。現在の私は詔敕の起草を論じる前提としても、こうした二つの草制の官が相互にいかに関係しているのか

か、あるいは差異があるのかが問われるべきではないかと考えている。草制の官として本来もっていた地位の差異を論じることを通じて、それが扱う詔敕の内容の別、ひいては兩制制度の成立までを見通すことはできないものだろうか。いずれにしても最初に、翰林學士と中書舍人（知制誥）の位置付けを明らかにしておく必要がある。この小論では、第一章では中書舍人（知制誥）を、第二章では翰林學士を取り上げ、それぞれ官僚制度の中でしめた位置付けについて概観してみる。第三章ではその議論を踏まえて、翰林制詔と中書制誥について、兩者の區別が生じていく要因などを探っていく。礪波氏のいわれる通り、兩制の分擔は唐代においては未確立なのであるが、少なくともその淵源を唐代に遡ることだけは可能なのではないだろうか。最後に第四章、第五章において、五代、宋代についての展望を述べることで、本稿の一應のまとめにしたい。

一 唐代における中書舍人の變遷

中書舍人は、中書省の中で奏疏の上呈、表奏に對する所見の提出、あるいは詔敕の起草や、その施行のための手續きにあたることなどを掌っていた（『六典』卷九、中書舍人）。このうち詔敕の起草は、唐代後半には、翰林學士の成立により分掌されるようになっていった。趙翼は『陔餘叢考』卷二六の中書舍人の項で、次のように記している。

開元より後、翰林學士専ら内命を掌り、其の任稍や輕んぜらるるを以ての故に、陸贄疏して以爲らく、詔命の出づる所は、本と中書舍人の職なり。軍興の時、應務に促迫せられて、權に學士を以て之れに代う。いま天下に事無し、合に職分に歸すべし。其の將相を命ずる制詔は、請うらくは中書に付して行遣されよ、と。事行われずと雖も、亦た唐初の中書舍人の本職を見るべきなり。

唐初には中書舍人があらゆる詔命を起草していたものが、玄宗の開元年間以降、翰林學士によって内命（内制）が分擔されたために、中書舍人の職責もやや輕くなったといわれる。なお翰林學士と中書舍人の草制の分掌をめぐる問題は、第三

章に譲ることにする。唐代の中書舍人は從來からも注目されており、孫國棟⁽⁶⁾、礪波護氏⁽⁷⁾らによって基本的な事柄が解明されてきた。ここではまずその驥尾に附して、律令に規定された草制の官、すなわち中書舍人の制度の概要を述べておきたい。なかでも問題としたいのは、中書舍人と知制誥がどのような關係にあったかということである。一つにはこの問題については、先學に對して付け加えるべき點があるからなのだが、さらに重要な理由としては、中書舍人と知制誥の官僚制度内の位置付けを明確にしておくことが、次章で論じる翰林學士との關連についても、一定の見通しを得る手掛かりになるからでもある。

礪波氏によれば、中書・門下・尚書の三省の中で、唐代を通じて中書省の優位がしだいに確立され、中書の中で實務を取り仕切っていた中書舍人も文士の極任、朝廷の盛選と稱されるエリートポストとなってくる。⁽⁸⁾『通典』職官典三、中書舍人に、

永淳より已來、天下は文章の道盛んにして、臺閣の髦彥は、文章を以て達せざるは無し。故に中書舍人は文士の極任、朝廷の盛選となり、諸官比す莫し。

といわれる通りなのであった。このように唐代中葉の高宗の末年頃より、中書舍人は非常に重視され、事實、詔敕の起草をはじめとした職掌も重要なものであった。それにともなうて、知制誥という稱號が史料の上に現れるようになる。『六典』では卷九、中書舍人の條の夾註に、

其の掌畫は事繁なり、或いは諸司官を以て兼ねる者、之れを兼制誥と謂う。

と、諸司の官による兼制誥（知制誥）のあったことを傳えている。知制誥とは、他官に中書舍人の職務を擔當させる場合に肩書として加えられる職名であった。⁽⁹⁾ いったい唐の官僚制度は『六典』などの記載をみると、體系立った整然とした姿を表してはいるものの、現實には要職と閑職の差異は、すでに歴然たるものとなっていた。中書の實權が強まるにつれ、さらには官僚機構の肥大化によって詔敕の起草が増大するにともない、中書舍人の職掌もまた膨張していったであろう。

こうした繁劇なポストには、別官の者に知らないし判の名を冠して、職務を分擔させることで、その擴大が圖られた。知制誥も中書舍人が重職となるにつれて設けられたのであった。知制誥が開始された時期は、『新唐書』百官志によれば「開元初め、他官を以て詔誥策命を掌る、之れを兼知制誥と謂う。」とあり、玄宗の開元初年であるかのように記載されている。山本隆義氏などもこれに従っておられ、『舊唐書』卷九四、盧藏用傳に見える、

神龍中、起居舍人・知制誥に累轉す。

の文のごときは、開元以前まで溯れる事例と指摘されながらも、これは知制誥という定名が附される以前のことなので、單に草制を兼掌したという意味であるとされている⁽¹⁰⁾。しかしこのような事例としては、ほかに『舊唐書』崔融傳（久視元年から長安二年の間、長安四年⁽¹¹⁾）、『新唐書』李乂傳（景雲二年⁽¹²⁾）など、知制誥を擧げる史料はいくつか見られるので、これらをすべて例外視するのは難しい。そもそも知あるいは判の名を附した職名は、開元以前であっても、必要に応じて置かれるべきものであったのだから、知制誥の場合も、『新唐書』の記事をあまりに嚴密に解して、開元初年という年代にこだわることはないのではないか。知制誥の成立時期は、武后時代ないしそれ以前まで溯るとみてよいだろう。

知制誥は唐代後半期以後、郎中や員外郎がその任にあてられて、その後中書舍人に昇格するのが一般的なコースになったといわれ⁽¹³⁾、いわば中書舍人の見習い役のごときものだったとされる⁽¹⁴⁾。知制誥から中書舍人への昇進がいかなる順序にもとづいてなされるかは、そのような意味で重要な問題なのであった。『唐會要』卷五五、中書舍人の長慶二年（八二二）の敕は、これを定めた規定であるとして、しばしば引用されている。

長慶二年敕す。今より已後、員外郎知制誥、敕して復た本官を授くるに、二周年を通計して、然る後各おの本行に依りて郎中に轉じ、亦た二周年に依りて正除を與う。如是れ中・後行郎中ならば、仍お前行に轉じ、一周年にして即ち正除す。如し更に是れ卑官知制誥の員外に轉すべき者は、亦た二周年を以て限となす。諫議大夫の知ず者は、前行郎中と同じくす。給事中并びに翰林學士は別に宣し、並びに此の限りに在らず。

員外郎知制誥が中書舍人に遷轉する場合の、それぞれの昇進コースと年限についての規定がこまかく設けられており、このような遷轉が實際になされたと孫氏は考えておられるようである。⁽¹⁵⁾ 知制誥から中書舍人に至る昇進の順序を整備しようとする試みは、これ以降も繰り返しなされ、大和四年（八三〇）の敕旨、⁽¹⁶⁾ 大和六年（八五二）の敕⁽¹⁷⁾によって同じ長慶二年の敕の内容が申明されている。それらを調べてみると、何がここで問題とされていたのが明らかになってくる。大和四年の敕旨に、

始め員外郎及び卑官より知ず者をして、（中略）皆な在職の日月を計り、以て等差となし、本官の年考を論ぜざるこ
と、頗る通理に叶う。

あるいは

並びに本官の日月を計るを許さず、但だ知制誥たること滿一周年を約して、即ち正授を與えよ。

などという文章があるように、本官の員外郎あるいは郎中の考滿にもとづいた遷轉が非難されていて、こうした一連の敕や敕旨の目的は、知制誥の在職年月によって中書舍人への昇格がなされるように改めることであった。しかしながら大和六年の敕の中では、長慶あるいは大和の敕が順守されておらず、舊來のままの遷轉の方法に因循していたと記されてお⁽¹⁸⁾り、十分には機能していなかったことがわかる。大和四年と大和六年の二度にわたって、もとの敕が繰り返して申明されること自體、これらの規定に實効性のなかった證左であり、すでに具文となっていたとみて差し支えないであろう。

それでは知制誥より中書舍人への遷轉は、實際にはどのように行われていたのか。おおよそは『文苑英華』卷三八二、錢珣撰「授祠部郎中・知制誥・賜緋王鉅守中書舍人制」から、その一端を窺うことができる。

敕す。遷ること速やかなるを欲せざれば、則ち人將に遷るを競いて、其の職に安んぜざるなり。掌誥の故事、多くは外郎を用い、歲滿ちて升り、乃ち正郎の位なり。歲又た滿ちて、始めて其の秩を得。官次を持重して、辭業を展張する所以なり。（中略）禁垣に棲みて、奮うに健筆を以てす。夫の規格の若きは、輕浮有る罔く、之れを試すこと三年、

未だ嘗て亂日なし。且つ聞くに學を講じては、必ず根本に務む。いま掌誥再遷すること、一に故事の如し。

ちなみに王鉅という人物は、唐末において考功員外郎から駕部員外郎・知制誥に任じられ、さらに祠部郎中・知制誥に進んで、右の敕をもって中書舍人に昇進している。⁽²⁰⁾これによれば、知制誥にあてられた者は員外郎の滿歲（任期の満了）をもって郎中に昇格し、郎中の滿歲をもって中書舍人に昇格するとされる。これが「掌誥の故事」とされるごとく、當時普通に行われていた遷轉なのであった。知制誥の職に三年あったという記載こそみられるが、これにもとづいて昇進がなされたと考えることはできない。そして先の詔敕でたびたび問題とされていたのも、このような員外郎・郎中の考滿による遷轉であったことにこそ注意すべきだったのである。

いずれにせよ知制誥は、尙書の員外郎あるいは郎中クラスから中書舍人に到達する昇進コースの中に取り入れられていた。『太平御覽』卷二二二、中書舍人に引く『五代史』漢史には次のようにある。

唐の李昭、尙書郎を以て出でて蘇州刺史となる。期歲、中書舍人を以て召還せらるるも拜さず、宰臣に謂いて曰く、省郎の舍人を拜すること、知制誥を以て次序となすも、便ち刺史より綸闈を玷せんとす、敢えて命を聞くには非ずと。乃ち兵部郎中を以て知制誥たり。翌歲、舍人を拜して之れを受く。

李昭は蘇州刺史より中書舍人に召還されたが、これが順序に反するものだと就官を拒んで、いったん知制誥にあてられることになった。そこからは、知制誥のポストは中書舍人の職につくには、その前にこれを通してのが正當なコースである。とまで、意識されていたのが明らかになるのである。

二 翰林學士の成立

玄宗の時代、文章に秀でた士を宮中の翰林院に召し入れ、翰林待詔さらには供奉として伺候させるようになっていた。彼らが禁中において掌っていた文章については、たとえば『舊唐書』卷九九、嚴挺之傳には、

(張) 九齡は、詞學を以て進み、入りて翰林に視草し、又た中書令となり、甚だ恩顧を受く。

と、翰林院において視草を行っていたという。『舊唐書』卷一九〇、席豫傳に附する徐安貞傳によれば、⁽²¹⁾

開元中、中書舍人・集賢院學士となる。上の文を屬し、及び手詔を作す毎に、多くは安貞に命じて視草せしめ、甚だ恩顧を受く。中書侍郎に累遷す。

やはり視草の語が使われており、ここでは皇帝自身が文章を作ったり、手詔を書いたりするのに、たずさわっていたことを表わしている。その対象とされた文章が、皇帝自製の文あるいは手詔とされているのには注意する必要がある。本來視草とは皇帝自作の文章に手を加えるという意味であつたから、翰林待詔ないし供奉たちによる視草も、多くは皇帝御製の文章を作成していたのであろう。趙翼は『陔餘叢考』卷二に視草の項において、上に引いた史料にも言及しながら、

「此れ皆な視草なり。故事、代言を視草となすには非ざるなり。」と、唐代においても、視草という語は單なる代言(詔敕の起草)の意味ではないとしている。開元二十六年(七三八)、もとの翰林院の南に獨立した學士院を建て、翰林學士が正式な職任となつた。趙翼の文章ではその冒頭において、

翰林の制書を草すること、輒ち視草と曰う。

と銘記し、翰林學士による制書の起草が視草といわれることが指摘されている。翰林學士は他の職事官との兼任の形を取り、中書舍人(知制誥)を兼ねる場合も珍しくはなかつた。『文苑英華』卷五八八、常袞撰「謝除考功郎中知制誥表」には、翰林學士と考功員外郎知制誥を兼ねていた彼が、兩職をいかにこなしていたかが載せられている。

禁垣の右、朝は如綸を奉じ、宸扆の前、夜は視草に參ず。

知制誥として晝に中書舍人院において詔敕を起草し(如綸を奉じ)、また翰林學士として夜に翰林學士院において詔敕を起草する(視草に參ず)情景がここに映し出されている。同じ草制の官とはいいながら、中書舍人(知制誥)の場合と、また翰林學士の場合とでは、出仕の場も職責もそれぞれ別にされている。翰林學士院が禁中に成立して、皇帝と密接した草制

の場がおかれることになった。ここでも翰林學士による詔敕の起草は視草といわれているが、この用語は、およそ翰林學士の草制を表現する場合にのみ用いられる言葉で、中書舍人のそれをいうときに使われることはまずありえない。翰林待詔や供奉が文學をもって皇帝の身邊に伺候していたのと同様に、翰林學士もまた皇帝の側近で文章を掌るポストであったことが、ここからも知られよう。今はとりあえず視草の中に、翰林學士の職掌のうちに皇帝の御製にたずさわるというニュアンスが引き繼がれている點だけを確認するにとどめる。翰林學士の職掌の本義が皇帝側近の文章の作成にあったという問題は、第三章に譲りたい。

翰林院において待詔あるいは供奉したのは、多くが朝官の文辭・學識の保持者だった。⁽²²⁾ また翰林學士にあてられた者は、丁居晦『重修承旨學士壁記』に列擧される歴代の學士の名銜をみても、やはり唐代後半を通じて朝官であり、文章によって奉仕するとはいいいながら、彼らは官人たる身分をもって皇帝に近侍する立場におかれたのがわかる。おそらく皇帝の周圍に出入していた者たちの中でも、翰林學士はとくに官人に屬するものであったために、皇帝から諮問にあずかることが次第に多くなつて、祕書官として重用されるに至つたのであろう。

このように翰林學士は詔敕の起草にあたり、皇帝に侍從し顧問にあずかることを職務としており、そのために出身をみても、科擧の及第者が多かったといわれる。事實、翰林學士の任用は、通常の官僚制度内の人事とは、おのずと異なる特徴をもっていたように思われる。李肇『翰林志』は次のように記す。

凡そ學士は定員無し、皆な他官を以て充つ。下は校書郎より、上は諸曹尙書に及ぶまで皆な之となす。入る所と班行は跡を絶ち、本司に拘わらず、朝謁に繋わらず。

翰林學士は令外の官であつたから獨自の官品を持たず、他の職事官を本官としていた。翰林學士の登用は、職事官でいえば諸曹の尙書より校書郎まで、つまり品官のトップクラスから最低ランクまで資序とかかわりない任用が行われており、ほかの史書の所載もこれを裏付ける。丁居晦『重修承旨學士壁記』には、その末尾に翰林學士の題名を附し、黃巢の亂以

表

品	三	四				五				六				七				八				九											
本官 年代	散騎常侍	侍	太常少卿	右子司業丞	國史中丞	御史中丞	中書舍人	給事中	練議大夫	郎中	同知制誥	縣外令	員外郎	起居舍人	起居郎	侍御史	右補闕	左補闕	殿中侍御史	太常博士	監察御史	左金吾衛倉曹	右驍衛兵曹	右拾遺	左拾遺	校書郎	祕書正字	廟丞	縣尉	不 明	合 計		
玄宗 肅宗 代宗 德宗 建中 興元 貞元 順宗 憲宗 穆宗 文宗 大和 開成 武宗 宣宗 懿宗	1		1				3 2 1 1				1					(1)					1 1					1 1							8
				1							1		2				1 1		2							1		1				5	
												3				1													1			6	
											1				1																	8	
										1				1 1		1	1 2				1				1	1			1			2	
											1		1																			2	
		1									1 2		4 1		1		2 3	1			3			2 1				2				24	
											1				1		1			1				1								5	
							1	2 1 2					3		1		1 1 2								1							15	
							1						4 3				1															9	
													4		1 1			1							1							8	
		2		1		1				6 3			5 1 1 2			2	1				2			3 1								29	
			1				2		1 3 1			1 11			4		1		1		1		1							4		32	

* 丁居晦『重修承旨學士壁記』の末尾に附す翰林學士の題名、および岑仲勉『翰林學士壁記注補』にもとづいて作成。題名は翰林學士とあわせ、翰林侍講學士・侍讀學士の姓名も記すが、これを削除して上の數字を得た。

* 肅宗時代の（ ）は、題名は補闕とのみ記すので、左右のいずれかが不明。

前の翰林學士の氏名、在職期間、その間の本官の遷轉が、一目瞭然である。さらにこの題名に對しては、岑仲勉氏が詳細な考證をなされている。⁽²³⁾ その中から、翰林學士に敍任された際の本官（職事官）を表にまとめてみた。これにもとづいて、翰林學士の人事の特徴を明らかにしてみたい。

山本隆義氏はこの問題について、『翰林志』とは異なる見解を出されている。翰林學士の遷敍が定制なく行われたのは、德宗以前に限られ、德宗の興元元年（七八四）一二月の詔に、「翰林學士の朝服と班序は、宜しく諸司官知制誥の例と同じくすべし」とあるのによつて、以後はこの規定に縛られて、もっぱら五、六品官より遷敍が行われたと考えられたのである。翰林學士の敍任が、全體として郎中（從五品上）、員外郎（從六品上）から起用されたものが多いのに着目して、こうした見解を出されたと思われる。⁽²⁴⁾ しかし表を一見すれば明らかのように、たとえば德宗の建中から貞元年間（七八〇—八〇四）における翰林學士の敍任は、三品が一人、四品が一人、五品が二人、六品が八人、七品が五人、八品が二人、九品が三人であり、あらゆる品秩より資序にかかわりなく登用が行われているし、次の憲宗の元和年間（八〇六—八二〇）についても、四品が一人、五品が三人、六品が六人、七品が六人、八品が六人、九品が二人と、同様に當てはまる。穆宗・文宗以降の時期においても七、八品以下からの任命は普通にみられるので、翰林學士の遷敍が、氏の說かれるように五、六品官に限られることはなかったようである。⁽²⁵⁾ 『翰林志』のいう「下は校書郎より、上は諸曹尚書に及ぶ」人材登用が、唐一代を通じて行われていたと見做して差し支えないだろう。

もう一點、表を見ていて氣がつくのは、翰林學士に起用された者の本官は郎中（從五品上）・員外郎（從六品上）・左右補闕（從七品上）・監察御史（正八品上）・左右拾遺（從八品上）の者が非常に多かったことである。また九品官の場合には、校書郎（正九品下）と縣尉（從九品下）が多かった。しかしここで重要なのは、このような本官がいずれも『封氏聞見記』卷三にいう、八備ないしそれに次ぐコースに相當する、いわゆる清要官すなわち當時のエリートポストであった點である。

八 備 進士―校書―畿 尉―監察御史―拾遺―員外郎―中書舍人―中書侍郎

それに次ぐ 制策―正字―〔畿丞〕―殿中侍御史―補闕―郎 中―給事中―中書令〔一〕は彌波護氏による

とあるのがそれである。端的にいつて、翰林學士の登用は中下級のエリート官人の拔擢であつたといえる。翰林學士を帯びつつ、職事官（本官）の方は遷轉を重ねていくことになるが、翰林學士となつた後に、その本官はどのような經路をたどつて昇進したのか、孫國棟氏の研究によつて、翰林學士の昇進コースを示せば次のようになる。⁽²⁶⁾

員外郎↓郎中↓中書舍人↓戸・工部侍郎（その間、翰林學士を兼任。）

なお、左右補闕―監察御史・左右拾遺が翰林學士を兼帶する場合の遷轉を『重修承旨學士壁記』の題名をもとに單純化して示すと、おおよそ、

拾遺↓補闕↓員外郎……↓（その間、翰林學士を兼任）

監察御史↓補闕↓員外郎……↓（その間、翰林學士を兼任）

と進むものが多いようである。ただし實際には、昇進經路の途中で翰林學士院を出院する場合が少なくない。翰林學士はいずれも八僞、ないしそれに次ぐエリートの通過すべき清要官を歴任しているのが明瞭であらう。⁽²⁷⁾『文苑英華』卷三八四、崔瑕撰「授蕭鄴翰林學士制」によれば、翰林學士となるべき官人に對して期待される能力は、次のごとくであつた。

我が密命に參じ、内庭に立つに至つては、即ち其の器識は弘深、文翰は遒麗、動けば能く正を持し、靜かなれば必ず中に居り、溫樹を指すも言わず、虛襟に附して隱す無きものを取る。此れ翰林學士を選ぶ所以の意なり。

溫樹を指すも言わずとは、禁中の語を決して漏らさなかつたという『漢書』孔光傳のエピソード。虛襟とは『晉書』姚興載記の虛心に人に接する謂いで、皇帝からこうした待遇を受けて、その前では直言をはばからないといった意味である。才覺にあふれ文詞は堪能、また行止の際には判斷はつねに的確であるなど、お決まりの美辭麗句が連ねられているが、そのいずれもが皇帝に近侍するために期待された能力なのであつた。翰林學士の登用は、中下級のエリート官人の中から資

序にとらわれずに優秀分子を拔擢して、皇帝に近侍させたところにその目的があったのである。

三 翰林制詔と中書制詔

(一) 制詔の内容

これまでに一般には、翰林學士の成立にともなって、その起草にかかる「翰林制詔」(内制)と、中書舍人が起草する「中書制詔」(外制)に分かれたのは、自明の前提とされていたようである。しかし先にふれた礪波氏の指摘のように、少なくとも唐代においては、兩制の職務分擔はまだ確立していなかった。つまり翰林制詔に分類されるべき制詔を中書舍人が起草したとしても少しもおかしうはないし、その逆もまた然りなのであった。『文苑英華』では、卷三八〇から四一九までが「中書制詔」に、また卷四二〇から四七二までが「翰林制詔」にあてられており、唐人の制詔や制詔が多く収録されている⁽²⁸⁾。しかしこれも實際には宋人の基準によって區分されたものにすぎないといわれる⁽²⁹⁾。なお『文苑英華』の翰林制詔の内譯は次の通りであった。

赦書・德音

冊文(皇帝冊文・尊號玉冊文・皇太子冊文・諸王冊文・皇后冊文・公主冊文・九錫文)

制書(命相・節鎮)

詔敕(命將・賜將士書・巡撫使・宣慰使・巡察使・巡幸・探賢・籍田・勸農・改革・興復・廢置・修理・誠勵職官・

誠勵風俗・禁制)

批答・蕃書・鐵券文・青詞・數文

しかしながら唐代の政書には、翰林學士の掌るべき制詔の範疇が擧げられているものがあるのも事實で、その中身を吟味

することで、『文苑英華』の制詔と制誥の區別がどのように生じていったのか検討する必要があるだろう。一例を挙げれば李肇の『翰林志』は次のようにいう。

凡そ敕書德音・立后建儲・大誅討・三公宰相を〔拜〕免し・將を命ずるは「制」と曰い、並びに白麻紙を用い、印を用いず。（中略）凡そ賜與・徵召・宣索・處分は「詔」と曰い、白藤紙を用う。凡そ軍旅を慰むるは、黃藤紙を用い、並びに印す。凡そ表疏に批答するは、印を用いず。凡そ太清宮・道觀の薦告の詞文は、青藤紙を用い、朱字、之れを青詞と曰う。凡そ諸陵の薦告の上表・内道觀の歎道文は、並びに白麻紙を用う。雜詞・祭文・禁軍の號は、並びに本を進む。〔一〕は内藤乾吉氏による

『翰林志』の掲げる制詔には、敕書德音・皇后太子の冊立・討伐の號令・將相の拜免を實施する際に用いるとされる「制」、いわゆる麻制があった。また賜與・徵召・宣索・處分の際に用いるとされる「詔」のほか、將兵に對する慰勞や、臣下の表章に對する批答、陵廟宮觀と嶽鎮海濱の祭祀の青詞などにも及んでいた。⁽³⁰⁾『翰林志』には同じく、將相の告身と外國に對する國書の外形、裝丁が載せられているが、國書はこの場合、賜與のための「詔」にあたることがわかる。『翰林志』に列擧されている制詔の種類と内容が、『文苑英華』に收録される翰林制詔と、おおよその所で對應していることを、とりあえず指摘しておかねばなるまい。『翰林志』は元和一四年（八一九）の撰であったから、『文苑英華』の淵源が唐代に求められたとしても、それなりの根據はあるということになる。楊鉅『翰林學士院舊規』には、「例・様」と題された内規や書式の雛型が多く收録されているが、それらの種類についても、⁽³¹⁾『翰林志』の制詔とほぼ同様であり、翰林學士の起草した制詔の中心が奈邊にあったかがわかる。

實際、翰林學士が掌るとされる制詔を「内制」とし、中書舍人が掌るとされる制誥を「外制」とする呼稱自體は、唐代の史料においても、すでにみられるところであった。内制という稱謂は『舊唐書』卷一二二、裴胄傳によれば、

代宗は、元載の朝綱を墮紊するを以て、（李）栖筠を徵して入朝せしめ、内制もて御史大夫を授け、方に將に大用せ

んとす。

と、代宗時代には早くも事例がみられる。『資治通鑑』では、これを大曆六年八月丙子に繫年した上で「内より制書を出だし」と記され、内制の意味がよく表われていると思われる。内制とは禁中において下される詔敕というのが、第一義的な謂いなのであろう。翰林學士と中書舍人の詔敕起草の分擔が確立する要因も、こうした唐代の史料の中から探ることができるのではないか。兩者の草制が、制度的には明確な違いがなかったという事實はひとまず措いて、制詔と制誥の範圍と内容を論じてみることに意味があるとすればその邊りになろう。⁽³²⁾

それでは、翰林學士によって制詔が分掌される過程、いいかえると『文苑英華』の區分にまで到達する要因はどのようなものであったのか、『翰林志』の貞元三年（七八七）の陸贄の上疏は次のようにいう。

貞元三年、陸贄上疏して曰く、（中略）玄宗の末、方めて翰林を置く。張垪は國親に因縁して、特に寵遇を承く。當時の議、以て宜しきに非ずとなす。然れども文章に唱和し、表疏に批答するに止まり、其の樞密に於いては輒りに預知せず。肅宗は靈武・鳳翔に在り、事に草創すること多く、權宜に急を濟して、遂に舊章を破り、翰林の中、始めて書詔を掌る。因循して未だ革めず、以て今に至る。歲月滋ます深く、漸やく職分を逾ゆ。

玄宗の時期には、皇帝のための詩詞の唱和や表章に對する批答の作成が、主たる職務であるにすぎなかったものが、安史の亂以降になると、重要な麻制の起草をも掌るに至ったといわれる。先學によっても、この事實は繰り返し説明されてきたところであるが、ここでは『翰林志』に示された翰林制詔の性格に注目することで、制詔成立のこうした過程をもう少し明確なものにしたい。

批答の作成が、開元二十六年（七三八）に翰林學士がおかれた當初に掌っていた文章の中心として擧げられているが、そうした批答の實例を一つ示しておく。

卿の先父は頃ろ多難に遭い、嘗て大功を立つ。毎に忠勞を想い、豈に存歿を忘れんや。先臣の績を念いて、名を太常

に書すと雖も、同姓の恩を推して、更に籍を宗正に附す。榮を一族に増さしめ、兼ねて寵を九原に延ぶ。卿ら或いは詩禮もて家を承け、或いは弓裘もて業を奉ず。威な新命を鍾え、慶は本枝に屬す。謝陳する所を省て、深く誠懇を嘉みす。〔『白氏長慶集』卷五六、答李遜等謝恩令附入屬籍表〕

批答とは皇帝に對して尊號を奉ったり、あるいは大赦や德音を賀し、また討伐の成功を賀する表、その他の賀表や謝表に對して下された返答である。いっぽう先に擧げた賜與・徵召・宣索・處分のために用いられる「詔」であるが、これらの事例は「與某詔」として白居易の文集、『白氏長慶集』の「翰林制詔」の中に數多く收録されている。その性格については、皇帝の書信とでも認めるのがもっとも適當なものであった。⁽³³⁾

茂昭に敕す。盧校ら至る。恆州の事宜を奏し、并びに別に論請陳獻する所の者を省て、具悉す。〔中略〕卿の誠懷を想い、當に朕の意を悉くすべし。〔『白氏長慶集』卷五六、與茂昭詔〕

於陵に敕す。安南の、環王國の賊帥李樂山ら三萬人を破るを賀す所の者を省て、具悉す。〔中略〕載ち賀す所を省て、深く乃の懷を見る。〔『白氏長慶集』卷五六、與於陵詔〕

これらの文章は、前者は、張茂昭が成徳節度使の情勢などについて上奏したものに對して、後者は、楊於陵が安南の蠻夷を破ったことを賀して奉った表章に對して下された、いずれも皇帝の返信である。『白氏長慶集』の「與某詔」の中には、臣下の表章に對する皇帝の返答として出されたものが少なからずみられた。これらはいずれも、表章に對して下された返答であつたから、批答とは内容の點できわめて類似しており、『翰林志』にいう「詔」と批答とは、共通する性格があると認めてもよさそうである。⁽³⁴⁾

第二章でも一度引用したが、『舊唐書』卷一九〇、席豫傳に附する徐安貞傳には、

開元中、中書舍人・集賢院學士となる。上の文を屬し、及び手詔を作す毎に、多くは安貞に命じて視草せしめ、甚だ恩顧を受く。中書侍郎に累遷す。

と、視草の對象に手詔の作成が含まれていたことをいう。手詔とは皇帝の私狀のごときもので、皇帝にきわめて近い文書であったから、⁽³⁵⁾「與某詔」もそれに含まれるとみて差し支えないだろう。翰林學士が早い時期からすでに「詔」の起草を行っていたことが、ここからもわかる。批答もまた翰林學士によって起草されていたのであり、同様のものとして取り扱われたのである。『舊唐書』卷四三、職官志二、翰林院はこの點について次のようにいう。

王者は尊極にして、一日に萬機あり。四方の進奏・中外の表疏の批答、或いは詔は中より出づ。

批答と詔とが並記されているのも、そのような意味においてなのである。また、進奏・表疏に對する批答ないし詔は、「中より出づ」と禁中より下されたという。すでに第二章において述べたように、翰林學士はもともと皇帝に近侍して、御製の文章を掌っていた。「與某詔」の場合は皇帝の書信ないしは返信であつたし、批答もやはり類似的性質をもつていた點からいえば、どちらも皇帝自作の言葉に相當するものとして禁中より發せられ、翰林學士が掌るべき制詔に取り入れられていたのであらう。

ついで天寶一四載（七五五）に勃發した安史の亂の後になると、翰林學士によって「輔臣を命じ、節將を除し、災患を恤し、不庭を討つ」（『唐會要』卷五七、翰林院）に使用する麻制の起草が開始されたといわれる。韋處厚『翰林學士記』によれば、この間の事情について、

至德より臺輔・伊說の命、將壇・出車の誥、天壤の澤を霑洽し、顧命を導揚するに逮んでは、議は中書に及ばず。

とあることから、『翰林志』の「制」の場合も、政治の混亂のために皇帝の周圍で決せられるに従つて、翰林學士による起草が始められたようである。『舊唐書』職官志では先掲の部分に續けて、

至德已後、天下用兵し、軍國多務なり。深謀密詔は、皆中より出づ。

と、先の文章と同様に「中より出づ」と表記されるように、深謀密詔も禁中から直接發せられた。皇帝の直接の意志によつて發令されたことが、「制」の起草の場合にしても、翰林學士に委ねられた契機となっている。翰林學士に歸せられた

のも、皇帝と近密な立場にあったためであらう。以上をまとめれば、詔敕の中でも、皇帝が決定や内容まで深く關與するようになる、その意味では皇帝直接の言葉というべきものが、禁中より發せられるにつれて、翰林學士の起草にかかるようになり、翰林制詔の範疇へとしだいに收斂していったのであらう。⁽³⁶⁾ 本節の冒頭に擧げた『文苑英華』の翰林制詔の區分も、このような過程の上に成立したものだといえよう。

(二) 制詔作成の手順

ここでは節を改めて、制詔がいかなる過程を踏んで作成されたのかを考えてみよう。なおこの問題については、中村裕一氏にも説明があるので、⁽³⁷⁾ これとあまり重複しない點を中心に論述を進めていきたい。制詔の起草は、皇帝の專斷によつて命が下される場合と中書門下の進擬をへてなされる場合などがあったが、皇帝の恣意によつて左右される前者よりも、ここでは多少なりとも制度的な裏付けのある後者を取り上げたい。『唐會要』卷五二、識量下によれば、制詔起草の手續きについて次のようにいう。⁽³⁸⁾

崔氏曰く、(中略) 凡そ白麻を降さんと欲し、中書門下に商量するが若きは、皆な前一日に文書を進め、然る後、翰林に付して麻制を草さしむ。

中書門下において草案が商量される場合は、進擬の狀が作成されると、制詔作成の一日前に皇帝に上呈して奏可を受け、その後翰林學士院に送付されて、これをもとに制詔の起草がなされていたことがわかる。

ところで中書門下において作成されたこのような草案、すなわち擬狀⁽³⁹⁾については、李德裕の文集、『會昌一品集』などに實例が數多く收載されているので、これらの中から一、二を掲げておきたい。

右。臣ら訪聞すらく、退渾と回鶻は久しく讐怨をなす。恐らくは勢を合するの後、思忠と心を叶わず、或いは別事を生ぜん。須らく遂泰をして審らかに劉沔と商量せしめ、如し疑うべき有れば、即便ち假に發遣すべし。其の興唐感義

奉臣誠らの軍、及び麴逆・退渾らの部落は先に各おの本管の都使・都督有り、須らく部領して自ら去かしむれば、即ち兵將を得て、各おの相い諳識して、指揮に易かるべし。望むらくは翰林に付して、劉沔・忠順・遂泰らに詔を賜り處分されよ。〔會昌一品集〕卷一四、李思忠下蕃騎狀〕

右。訪問すらく、諸道の客軍皆な自ずから都頭有り、常に相い願望して命を效すを肯んぜず。請うらくは河朔の軍法に依り玄佐・劉沔に委ね、三二千人毎に一團となし、如し應急使用の處有れば、便ち一團を點じて去かしめ、一切の成敗は責めは都頭に在らしめよ。此くの如くすれば、則ち人は心を齊しくし、將は必ず法を恐れ、機に臨んで敵に赴き、敢えて因循せず。如し允許を蒙れば、望むらくは翰林に付して、詔を賜り處分されよ。未だ審らかにせず。〔會

昌一品集〕卷一五、論玄佐・劉沔下諸道客軍狀〕

擬狀ではどちらも、行軍をめぐる現狀と對策を詳しく論じた上で、藩臣に對して詔を賜るように求めており、最後に翰林學士院に送付されることを願つて文章が結ばれている。擬狀の起草は、宰相自身の手になつていたようである。沈括『夢溪筆談』卷一、故事一には、五代後唐の事例ではあるものの、應順元年（九三四）の中書門下の案檢が收録されており、擬狀とそれに附せられた制書を掲げた上で、

押檢二人、馮道と李愚なり。狀檢は瀛王の親筆にして、甚だ改竄句抹の處有り。（中略）宋次道は『開元宰相奏請』・鄭畋『鳳池稿草』『擬狀注制集』は悉く四六を用い、皆な宰相自ら草すと記す。いま此の擬狀、馮道の親筆なるは、蓋し故事なり。

と記され、この擬狀が宰相馮道の親筆にはかならず、唐の故事に従つたものであるといわれる。宋敏求の『春明退朝錄』によれば、『開元宰相奏請』や鄭畋撰の『鳳池稿草』『擬狀注制集』などの奏狀集が、當時なお存在していたことから窺われるように、唐代においては、擬狀とは宰相本人の作成にかかるべきものであったことがわかる。皇帝の裁可をへた後、翰林學士院に送付され、そこで行われた制詔の起草は、こうした擬狀にもとづいてなされていたのであろう。

四 五代の翰林學士

朱全忠が唐を篡奪して後梁を建國して以來、五代の動亂期においても詔敕の起草は翰林學士と中書舍人（知制誥）によつて擔當され、唐代の制度がおおむね繼承されていた。翰林學士の出身を見ると概して名望の出が少なく、進士出身者も全體の半ばに満たないといわれ、まためまぐるしく王朝が交替した時代の特性を反映して、數代の王朝に仕えて累遷していく者が多かつたとされる。⁽⁴⁰⁾

ところで翰林制詔の内容も若干ながら變化をとげ、『翰林志』に掲げられた「制」の範圍が擴大されて、宋代の翰林制詔の姿にしだいに近づいてきている。『五代會要』卷一三、翰林院によれば、

天福二年四月、（中略）敕す、『翰林志』に據るに、立后と言うも立妃と言わず、儲君と言うも親王・公主と言わず、兼ねて三師は三公の上に在るも、文は並びに載せず。今後は立妃及び三師・三公・宰相を拜免し、將を命じ、親王・公主を封ずるは、並びに制命を降し、餘は令式に従う。

と、後晉の天福二年（九三七）には、それまでは立后建儲、宰相の拜免などに限られていた麻制の對象が、立妃、三師三公の拜免、親王と公主の封號の授與にまで擴大されている。また『舊五代史』卷一一〇、周書一、太祖紀一には、

隱帝位を嗣ぎ、樞密使を拜し、檢校太尉を加えらる。舊制、樞密使の未だ使相を加えざる者、麻制を宣せざるも、是に至りて之れを宣す。帝より始まるなり。

とあり、後漢の乾祐元年（九四八）には、後周の太祖郭威が麻制によつて樞密使に任じられ、これ以後、樞密使の授與には麻制が用いられることになった。宋代における内制の基準、たとえば『文苑英華』の中の翰林制詔などは、このような過程をへた上で形を整えていったものであろう。

後晉の天福五年（九四〇）九月、翰林學士はいったん廢止された。蘇易簡『續翰林志』は、この事件について次のよう

に記す。

晉天福六年五月詔す、『六典』に云う、(中略)古昔已來、典實斯に在り、爰れ近代より、別に新名を創る。いま運は興王に屬し、事は師古に従い、舊貫に仍りて、以て前規を耀かしむべし。其の翰林學士の公事は、宜しく並びに中書舍人に歸すべし。宰臣馮道の奏に従うなり。是れより舍人、晝に直する者は中書の制に當たり、夜に直する者は内制に當たる。

『六典』に記載されたかつての制度へ復歸することを掲げて、詔敕起草の職務は中書舍人に歸されたのであった。こうした経過については、山本隆義氏も詳しく取り上げられており、樞密使もほぼ同じ時期に廢されたのとあわせて、これが宰相の權限を強化しようとする施策であることや、内外兩制は中書舍人により晝夜に分擔されたことなどの指摘がなされている。⁽⁴¹⁾ここではさしあたり、草制の職掌がすべて中書舍人に歸されたとはいいながら、内制と外制の區別そのものは、晝夜の分擔という形で溫存されている點に注意しておきたい。そこからは、翰林學士の掌る制詔と中書舍人の掌る制詔の區別がすでに確立しており、もはや時代を逆行することができなかったのを知ることができよう。翰林學士による草制は、その後間もなく開運元年(九四四)六月に再開された。『續翰林志』では次のような文章がこれに續いている。

開運元年六月復た詔有りて曰く、翰林學士と中書舍人は分ちて兩制となし、各おの六員を置く。偶たま近年より權に内署を停む。況や詔命を司るは、必ず深嚴に在り。將に宜しきに從わしめ、卻つて舊に仍らしめ、宜しく復た學士院を置くべし。

これまで通り、翰林學士と中書舍人が兩制を分擔することとされた。兩制制度はこれ以降、五代、宋を通じて維持されることになるのである。

五 宋代の翰林學士と知制誥——結びにかえて——

さてこの小論では唐代の草制の官、すなわち翰林學士と中書舍人（知制誥）の官僚制度内での地位を検討することを通じて、翰林制誥と中書制誥という兩制の區別が成立する要因について視座を得ることを目指した。以下要點を記す。唐代の中書舍人については、知制誥との關係を中心に取り上げた。唐代の中葉より、中書舍人がエリートポストとして臺頭するにもなつて知制誥が設けられたこと、また成立の時期については『新唐書』の記載よりも前に溯らせることが可能であることを指摘し、あわせて知制誥から中書舍人に達する昇進コースの詳細についても述べた。また翰林學士は、任用のありかたを検討した結果、最低ランクから高官クラスまであらゆる資序より登用されたという通説の正しさをまず確認した。さらにこれらが『封氏聞見記』にいう八儔ないしそれに次ぐ清要官であったことを踏まえて、事實上、中下級クラスのエリート官人の拔擢を意味したこと、そこには有爲な官人を皇帝の近臣として集めるという目的があったことなどを指摘した。以上の草制の官の個々の考察を踏まえた上で、翰林學士と中書舍人の詔敕の分掌の問題は、翰林制誥の方をもらばら論じることになった。従来からも、翰林學士は玄宗期には詩詞の唱和や批答の作成のみを行っていたのが、安史の亂以降、麻制の起草をも掌るようになったと説明されており、本章の所論も一應はそれに従っている。ただここでは、皇帝の直接の言葉を禁中より下すことが必要となるにつれて、翰林學士にその起草が委ねられるようになったこと、それにともなつて、翰林制誥の内容が確定されたことを明確にしたかったのである。また制誥作成の手續きや、五代の兩制制度の展開についてふれて、宋代の翰林制誥の區分に近づいていく過程も示した。

最後に、宋代の翰林學士と知制誥について見通しを述べて結びに代えることにしたい。宋代の初めには中書舍人は寄祿官となつて實職を失っていたので、内制は翰林學士が、外制は知制誥が分擔して詔敕の起草が果たされていた。『朝野類要』卷二、稱謂、兩制は次のようにいう。

翰林學士の官は之れを内制と謂い、王言・大制詔・詔令・赦文の類を掌る。中書舍人は之れを外制と謂い、亦た王言・凡詔詞の類を掌る。

ここでは元豐五年（一〇八二）の官制改革によって、知制詔が中書舍人に改められた後のことをいっているため、外制は知制詔ではなく中書舍人とされている。宋代の翰林學士は、知制詔として外制を掌った者より遷敘されることが確立していたが、このことは同時に、翰林制詔と中書制詔の重要性の違いが、ポストの上下の差にまで反映するようになったことを意味している。楊億は『談苑』の學士草文の中で、宋代に翰林學士が掌っていた文章を列挙しているので、これを掲げておこう。

學士の職、草する所の文辭は、名目浸やく廣し。公王・將相・妃主を拜免するは制と曰う。恩宥を賜うは赦書と曰い、德音と曰う。公事を處分するは敕と曰う。榜文號令するは御札と曰う。五品以上に賜うは詔と曰い、六品以下は敕書と曰う。群臣の表奏に批するは批答と曰う。外國に賜うは國書と曰う。道醮は青詞と曰い、釋門は齋文と曰う。教坊宴會は白文と曰う。土木興建するは上梁文と曰う。宣勞錫賜は口宣と曰う。（下略）

なお『歐陽文忠公文集』『東坡集』『樂城集』など、宋人の文集に收録されている翰林制詔を調べてみると、『談苑』の區分でいえば詔・敕書・批答・口宣の數が、他を引き離して壓倒的に多いことがわかる。宋代において知制詔が官人の辭令書を日常的に處理していたのに對して、翰林學士が通常扱っていたのは、多くがこのような皇帝の書狀とでもいふべき文章だったのでないだろうか。

註

（一）山本隆義『中國政治制度の研究』（同朋舍、一九六八）。

（二）礪波護『唐代の制詔』（『唐代政治社會史研究』、同朋舍、

一九八六に收録）。

（三）孫國棟『唐代中央重要文官遷轉途徑研究』（龍門書店、一九七八）。

（四）唐代の中書舍人についての先行研究としては、礪波護『唐の三省六部』（『唐代政治社會史研究』に收録）、孫國棟『唐

代三省制之發展研究」「唐代中書舍人遷轉途徑考釋」(いずれも『唐宋史論叢』、龍門書店、一九八〇に収録)。そのほかに張連城「唐後期中書舍人草制權考述」(『文獻』九二二、一九九二)、張東光「唐宋的知制誥」(『文史知識』九三一、一九九三)がある。

- (5) 山本前掲註(1)著書のほかに、翰林學士に關する研究は、矢野主税「唐代における翰林學士院について」(『史學研究』五〇、一九五三)、築山治三郎「唐代政治制度の研究」第一章第三節(創元社、一九六八)、向井潤「唐代の翰林學士」(『東洋史苑』二二、一九八二)、古瀬奈津子「中國の内廷と外廷」(『東洋文北』六八、一九八八)がある。なお翰林學士の專論ではないが、内藤乾吉「敦煌出土の唐騎都尉秦元告身」(『中國法制史考證』、有斐閣、一九六三に収録)、鈴木虎雄「支那の詔敕文とその起草者」(『東方學報』京都、一九三八)には、参照すべき記述がみられる。中國人による研究としては、古くは岑仲勉「翰林學士壁記注補」「補唐代翰林兩記」(『郎官石柱題名新考訂』、中華書局、一九八四に収録)、また周道齊「漢唐宰相制度」(再版、大化書局、一九七八)。これに對し最近の論著に、劉健明「論唐代翰林院」(『食貨月刊』復刊一五・一七・八、一九八六)、楊友庭「唐代翰林學士略論」(『廈門大學學報』一九八五・三、一九八五)、趙康「論唐代翰林學士院之沿革及其政治的影響」(『學術月刊』一九八六・一〇、一九八六)、牛致功「唐代的學士」(『社會科學戰線』一九八七・一、一九八七)、袁剛「唐代的翰林學士」(『文史』三三三、一九九二)、同「隋唐中樞體制之發展演

變」(文津出版社、一九九四)、張東光「唐宋時期的中樞祕書官」(『歷史研究』九五・五、一九九五)などがあるが、これ以外にも未見の論文が若干ながらある。なお一昨年、楊果「中國翰林制度研究」(武漢大學出版社、一九九六)が出版されたときが、残念ながらこれも未見である。

- (6) 孫氏前註(4)論文。

- (7) 礪波氏前註(4)論文。

- (8) 礪波氏前註(4)論文。

- (9) 知制誥の職責は「掌畫」(『六典』)や、「詔誥策命を掌る」(『新唐書』百官志)とされるものの、詔敕の起草だけにはとどまらず、中書舍人のその他あらゆる職掌にまで及んでいた。中書舍人は詔敕すべてに「署してこれを行す」(『六典』)とされる通り、詔敕の施行にあたり、中書令が宣し、中書侍郎が奉し、中書舍人が行するという手順を経るとされる。ところで現存する唐代の告身を調べてみると、知制誥が行している事例がいくつも見られる。たとえば「開元二十年李暹告身」(葉夢得『避暑錄話』下)のうち、中書の押署の部分を探れば、

銀青光祿大夫兵部尚書兼中書令集賢殿學士蕭嵩宣

中書侍郎闕

知制誥王丘

奉行

とあり、奉と行の手續きは、知制誥の王丘によってなされている。「咸通二年范隋告身」(『金石萃編』卷一一七、唐七七)のやはり中書の押署の部分のみを掲げると、

檢校司徒中書令使

中書侍郎兼工部尚書平章事杜審權奉

駕部郎中知制誥王鐸行

知制誥の王鐸が行しており、知制誥が中書舍人の行するのと同様に、詔敕施行の手續きにたずさわっていたことが知られる。また有司の奏疏に對する審議についても、知制誥もこれを行っていたか考えるべき痕跡がある。『元氏長慶集』卷三十六の「中書省議舉縣令狀」がそれである。

元和十五年八月日、中書舍人武儒衡等奏、駕部郎中・知制誥臣李宗閔、中書舍人臣王起、庫部郎中・知制誥臣牛僧儒、祠部郎中・知制誥臣元稹吏部重奏舉薦縣令節文。(中略) 同前五舍人署。

中書舍人の六押は安史の亂を境にやめられたが、元和一五年閏正月にいったん復活されていることから、孫國棟氏はこれを吏部の奏疏に對して中書舍人が可否を判案した狀であると見做された。注意されるべきは、これに署名している中に知制誥の李宗閔、牛僧儒、元稹の名があることで、このような表章の參議には知制誥もあづかっていたとみてよいだろう。知制誥は、詔敕の起草以外のものも含めて、中書舍人のすべての職掌を擔當していたと見做してよからう。

(10) 山本氏前掲註(1)著書。また張東光氏前掲註(4)論文も、開元以前の事例を挙げられるが、定制をいまだ成さないものとされる。

(11) 『舊唐書』卷九四、崔融傳。(久視元年)左授蔡州長史。頃之(中略)又請召春官郎中・知制誥事。長安二年、再遷鳳閣舍人。(中略)四年、除司禮少卿、仍知制誥。

(12) 『新唐書』卷一一九、李父傳。(中略)韋氏之變、詔令嚴

促、多父草定。進吏部侍郎、仍知制誥。繫年は嚴耕望『唐僕

尚丞郎表』による。

(13) 孫氏前掲註(3)著書。

(14) 礪波氏前掲註(4)論文。

(15) たとえば孫氏前掲註(3)著書など。遷轉のコースと年限をまとめると次のとおり。

前行員外郎知制誥↓(二周年)↓前行郎中知制誥↓(二周年)↓中書舍人

中・後行員外郎知制誥↓(二周年)↓中後行郎中↓(二周年)↓前行郎中知制誥↓(一周年)↓中書舍人

(16) 『唐會要』卷五五、中書舍人。大和四年、中書門下奏、伏以制誥之選、參用高卑、遷轉之時、合係勞逸。頃者、緣無定制、其間多有不均。准長慶二年七月二十七日敕、始令自員外郎及卑官知者、同以授職滿一年後、各從本秩遞與轉官。如至前行正郎、即以周歲爲限、皆計在職日月以爲等差、不論本官年考、頗叶通理。凡是因職轉敘、皆與此文相當。其有本官已是前行郎中、年月已深、方被獎用、即授官數月、合正除。比類舊制、卻成僥倖。將垂永久、須有商量。自今以後、從前行郎中知者、並不許計本官日月、但約知制誥滿一周年、即與正授。其諫議大夫知者、亦宜准此。即遲速有殊、比類可遵、并請依長慶二年七月二十七日敕處分。敕旨、依奏。

(17) 『唐會要』卷五五、中書舍人。大和六年六月敕、大和中敕旨條流制誥改轉事、頗爲得中、實重官業。自後因循不守、有紊典章、遂便遷轉頻繁、近日卻成壅滯。自今以後、宜舉大和

四年舊敕、便永遵行。

- (18) 前掲註(17)。自後因循不守、有紊典章、遂便遷轉頻繁、近日卻成壅滯。

- (19) 『文苑英華』卷三八二、錢珣撰「授考功員外郎賜緋魚王鉅駕部郎中知制誥制」。

- (20) なお王鉅が中書舍人に任命された時期は、岑仲勉『郎官石柱題名考新訂』によれば、昭宗の乾寧二年(八九五)末から光化三年(九〇〇)六月の間である。

- (21) 韋執誼『翰林院故事』に、

自是始選朝官有詞藝學識者、入居翰林、供奉別旨。(中略)時中書舍人張九齡・中書侍郎徐安貞等、迭居其職。

とあり、徐安貞が翰林供奉となったのは中書侍郎のときのようなので、視草は集賢院學士として行ったという方がよいかもしれない。なお李肇撰『翰林志』は翰林供奉ではなく待詔と記す。山本氏は『翰林院故事』『翰林志』に、集賢院學士が最初は書詔の作成にあずかっていたものが、翰林學士の設置にもなってやめられたとあるのによって、徐安貞の視草を集賢院學士の地位にもとづくものとされる(山本前掲註(5)著書)。いずれの場合であれ、翰林學士の前身にあたることに変わりはないだろう。

- (22) 『翰林院故事』。自是始選朝官有詞藝學識者、入居翰林、供奉別旨。この点には、袁氏前掲註(5)論文も一言ふれている。しかし、それ以上に立ち入った言及は、残念ながらなされてはいない。

- (23) 岑仲勉「翰林學士壁記注補」(『郎官石柱題名新考訂』に

收録)。

- (24) 山本氏前掲註(1)著書。

- (25) 山本氏のいわれた五、六品官(郎中、員外郎)からの起用は、表にもとづく限りでは、文宗の開成年間(八三六―八三九)以降に顯著になり始めるようにみえる。

劉氏前掲註(5)論文などでも強調されるように、唐代を通じて翰林學士は地位を上昇させていたので、あるいはこの頃より、下級の官人には容易には得難いポストになってきたのかもしれない。とまれ、より詳細は後考にまきたい。しかしながら左右補闕(從七品上)・監察御史(正八品上)・左右拾遺(從八品上)からの拔擢も相變わらず行われている。唐一代において品秩にかかわりなく、翰林學士の起用が行われていることに変わりはないと思う。

- (26) 孫氏註(3)著書。

- (27) 翰林學士は在職中に知制誥を加えられることになっていたし、また翰林學士は昇進コース上で、中書舍人を通じていたので、知制誥をへて中書舍人へ進むコースと密接に結び付いていた。つまり翰林學士の人事は中書舍人を歴任するような有望な官僚を、皇帝に近從させることにはかならない。ところで『新唐書』百官志では、翰林學士と知制誥のかかりについて、

入院一歲、則遷知制誥。未知制誥者、不作文書。

と記し、これによれば翰林學士は知制誥を加えられるまで、文章の作成をしないといわれている。しかし知制誥にあてられるまで一年間にわたって、詔敕の起草をしないというの

は、何といっても不自然である。山本氏もこれについてふれており、翰林學士が知制誥に補せられる以前の草制も珍しくないことを指摘され、『新唐書』の所傳はあくまで原則をいっただけのものにすぎないとされた(山本氏前掲註(5)著書)。これになお一つ付け加えるならば、『新唐書』の出典は『翰林志』であると思われることである。『新唐書』卷四六、百官志一の前後の文章も含めて掲げると、

凡充其職者無定員、皆以他官充。自諸曹尚書下至校書郎、皆與遷。入院一歲、則遷知制誥。未知制誥者、不作文書。

一方の『翰林志』には、

凡學士無定員、皆以他官充。下自校書郎上及諸曹尚書、皆爲之。所入與班行絕跡、不拘本司、不繫朝謁。常參官二周爲滿歲、則遷知制誥。一周歲爲滿歲、則奏就本司判、記上月日、北省官宰相送、南省官給舍丞郎送上。

と書き残されている。『新唐書』の記載は、『翰林志』を節略したものであることが直ちに納得されよう。注目したいのは、前者の「未だ知制誥ならざる者は、文書を作さず。」の一節は、ほかの箇所とは違って後者では全く言及がないことである。『新唐書』の問題の箇所は少なくとも根拠は薄弱なので、この一節は『新唐書』の撰者が誤った判断で書き加えたという疑いを抱かずにはいられないのである。もちろん『新唐書』にはかによるべき典拠があった可能性は否定できないが、山本氏もいわれたごとく、知制誥に補せられる以前であっても、翰林學士による詔敕の起草はごく普通にみられ、當時の實態とも大いにずれているのだから尙更である。

私はこの所傳の眞偽を疑った方がむしろよいのではないかと思っている。

(28) 『文苑英華』の「中書制誥」はすべてが官人の辭令書および封號である。なお「翰林制誥」の内容については後述する。

(29) 礪波氏註(2)論文。

(30) 中村裕一「唐代制敕研究」(汲古書院、一九九〇)は、唐代の詔敕を書式を中心にして廣範に論じており、また近刊の同氏『白氏文集』の「翰林制誥」と「中書制誥」(『唐代公文書研究』、汲古書院、一九九六に收録)とともに、本章で論じる翰林制誥の實例を豊富に引用している。

(31) 楊鉅の「翰林學士院舊規」の「例・様」は次の通り。草麻例・草書詔例・書詔様・祠祭祈賽例・道門青詞例。

(32) ここでは私の現在の準備と關心から、翰林制誥がもつばら議論の中心となったことは、あらかじめお断りしておかねばならない。中書制誥については礪波氏前掲註(2)論文、および近年の張連城の註(4)論稿で詳しく論じられているので、参照していただきたい。

(33) 丸山裕美子「慰勞詔書・論事敕書の受容について」(『延喜式研究』一〇、一九九五)、中村裕一「論事敕書」(『唐代制敕研究』第三章第五節)。

(34) 宋代に入ると、執政以上の奏章には批答が下され、それ以下には詔が下されるというように、官人の位階に應じて使い分けられるという理解もみられる。『朝野類要』卷四、文書、批答には、

執政以上、有章奏請、則降批答、以下則降詔。

と説明されるのも、批答と「詔」の性格に共通性があるからだろう。

(35) 中村裕一「手詔（手制）」『唐代制敕研究』第二章第四節。

(36) 張東光氏註(5)論文では北宋を主たる例にとって、内制を「皇帝が個人ないし國家の名義で發布する文書」、外制を「宰相を通過して政府の名義で發布する文書」と分類して説明される。内制の性質を皇帝自身の判斷に由來するものと見做されているようで、氏の見解は、本節において考察した唐代後半の延長上に位置付けることができるであろう。

(37) 中村裕一『白氏文集』の「翰林制詔」と「中書制詔」。

(38) この史料は、中村氏も引用されている。ただ、氏は中書門下において決裁された白麻の原案が中書舍人院に進められ、そこから翰林院に送られて、翰林學士によって起草されると見做し、中書舍人の經由を想定しておられるのだが、この點については疑問が残る。

(39) 擬狀は『資治通鑑』卷二四三、長慶三年九月の條の胡註では、「擬狀は狀を進め擬す所の除目を謂うなり。」と説明されている。

(40) 山本氏前掲註(1)著書。

(41) 山本氏前掲註(1)著書。

THE FORMATION OF THE “TWO DRAFTERS” SYSTEM 兩制制度

ONO Tatsuya

This article deals with the imperial edict system under the Tang dynasty 唐. The zhong-shu she-ren 中書舍人 (or the zhi-zhi-gao 知制誥) carried out the duty of drafting the imperial edicts under the system of “three departments” 三省制 of the Tang. On the other hand, the emperors’ intimate attendants with the title of academician 學士 often drafted the imperial edicts from the early Tang, which paved the way for the establishment of the han-lin academician 翰林學士 in 738. Being the drafters of imperial edicts, the zhong-shu she-ren (or the zhi-zhi-gao) and the han-lin academician were different in origin and significance. As an exploration of the points of similarity and difference between them is necessary for understanding the imperial edict system, the author here seeks to investigate their roles in the drafting process, that is the formation of the “two drafters” system. Chapter one discusses the relation of the zhi-zhi-gao to the zhong-shu she-ren. The zhi-zhi-gao was instituted with the rise of the zhong-shu she-ren’s rank by the reign of the Empress Wu 武后. It’s promotion to the zhong-shu she-ren depended on its fulfilment of merit ratings of titular post 本官考滿 instead of its tenure. Chapter two examines the appointment of the han-lin academician. The han-lin academician was selected from the elite officials of middle and lower rank, and served the emperors as their close attendants. Following this argument, chapter three accounts for the division of drafting duties among the han-lin academician and the zhong-shu she-ren (or the zhi-zhi-gao). As the emperors had to give some imperial edicts in their own words from the imperial court, the han-lin academician was entrusted with their draftings which resulted in the formation of the “two drafters” system. Finally, the author explains the procedure for making the edicts by the han-lin academician 翰林制詔, and the development of the “two drafters” system in the Five 五代 and Song 宋 dynasties.